

# 君がいる世界

木口まこと

からだは少し浮いたような感覚があつて、ふつと意識が遠のいた。

気がつくくと、僕はどこかに立っていた。右腕をゆっくり上げてみる。腕は自由に動かせる。そのまま右手で頭から被せられているマスクを取った。そこは高い木が立ち並ぶ林の中だった。頭上を覆う緑の葉のあいだから木漏れ日が差し込んでいる。日差しの具合から、たぶんまだ午前中なのだろうと見当をつけた。季節は初夏のようだ。まだマスクを持っていたことに気づいて、近くの木の根元に投げ捨てる。

東京から電車で一時間ほどの町に着くだろうとは聞かされていた。ここは町はずれなのかもしれない。目を細めてあたりを見渡した。左手の二十メートルほど離れたところに、小屋が見えた。少し湿った草を踏みながら、小屋に近づいてみる。

かつては休憩所にでも使われていたのだろうか、その木造の小屋は放棄されて何年も経っているように見えた。小さな窓ガラスは汚れていて、中の様子は伺えない。小屋に沿って回っていくと、裏手に扉があつた。取手を軽く押してみても、それから引く。蝶番がきしむ音とともに扉が開いた。

微かに光が入る薄暗い小屋は六畳ほどの広さだろうか。扉の横の壁にスイッチを見つけたが、入れてみても電灯は点かない。部屋の真ん中に木でできた頑丈そうなテーブルと二脚の椅子、扉と反対側の窓辺には小さな机が置かれていた。ひとつの壁に流し台、その横の扉は便所の入り口かもしれない。

埃が積もったテーブルにひとつだけ載っている茶碗を覗き込んでみたが、乾き切ったお茶の跡が底にこびりついているだけだった。机に目をやると、何かが置かれているのが見えた。近づいてみる。それは手帳を破つたらしい紙片だった。手に取って、僕は小さく声を上げた。

『同志へ。今は西暦二〇二〇年だ。林を西に抜ければ町がある。生き続けろ』紙にはそう書かれていた。

最後に見慣れたキムの署名がある。キムは二年前の世界に着いてこの書き置きを残したのだ。埃の積もりかたからすると、ずいぶん以前のものようだ。いったい今は何年なのだろう。紙片をポケットにしまいかけたが、思い直してもとの場所に戻した。持つて帰るのは危険だ。

小屋の中をひと通り見て回ったが、ほかに気になるものは見当たらなかった。小屋を出て、後ろ手に扉を閉じる。

西へ向かえとキムは書き残していた。太陽の方向を見て、西と思われるほうへ足を進める。五分ほど歩いて、少し汗ばんできた頃に林を抜けた。そこはさほど広くない舗装道路の脇で、ちょうど目の前を見慣れない形と色の乗用車が走っていくところだった。その後も時折車が通り過ぎた。

道路沿いにぼつぼつと民家があり、しばらく進むとやがて小さな商店街に出た。店の佇まいになんとも言い難い違和感を覚えながら、店頭を眺めて歩く。『店商林小』という文字に首を傾げたが、すぐに左から読むのだと気づいた。そう思って他の店の看板を見ると、たしかに横書きの看板はどれも左から右に読むように書いてある。簡略化されていて、すぐには読めない文字もあった。貨幣の価値が百倍違うと聞かされてはいても、店頭に並べられた小さな日用品に何百円という値札がついていると、やはりぎよつとする。

一軒の店のガラス扉に『Music shop』と書いてあった。

「英語？」と僕は小さく呟いた。

扉に半紙二枚ほどの大きさのポスターが貼ってあった。『ロック・フェスティバル』の文字が踊り、その下に小さな文字が並んでいる。最後に日付けが書かれていた。

「二〇三四年八月二三、二四」と日付けを読み上げて、しばらく呆然とポスターを眺めた。僕は十二年後の世界にやってきたのだ。

ロック音楽は六十年ほど前にアメリカで生まれた。僕たちは改造した短波ラジオを使って雑音の向こうに微かに聴こえる音楽を聴いてはいたが、レコードを合法的に手に入れることはできない。アメリカやヨーロッパからの音楽は厳しく検閲されていて、聴けるものは限られる。それなのに、この世界ではロック音楽を自由に演奏して、聴けるらしい。それだけでも驚きだった。

ポケットからカメラを取り出して、日付けがはいったポスターをとりあえず写真に収め、それからいくつかの商店の写真を撮った。

見慣れない商品が並ぶ店先を眺めながら歩いていると、突然体が浮き上がる感覚があり、目の前が真っ暗になった。

眩しさに目を閉じた。思わず手で目を覆おうとしたが、腕が固定されていて動かせなかった。僕は硬い寝台に横たわっている。元の場所に戻ってきたのだ。

「初めての旅はどうでした、新井さん？」声が聞こえた。武田だ。僕はゆっくりと目を開く。金属の音がして、両腕が自由になった。頭を上げると茶色い軍服に身を包んだ男がふたり目の前に立ち、ふたつの拳銃の銃口がこちらを睨んでいた。

「どうと言われても」僕はまだぼんやりした頭で答えた。

「まあ、驚かれたでしょうからね」武田が言った。手入れが行き届いた灰色の背広はさつき見た姿と変わっていない。すらりとした長身、きれいに切り揃えられた白髪、細身の眼鏡。美男子と言っていだらう。丁寧な言葉遣いとは裏腹にその口調は鋭かった。

「最初の旅は二時間。標準的です。長くもなければ、短くもない。尋問は明日です。それまでにいろいろ思い出しておいてください。カメラを」

上着のポケットからカメラを取り出すと、軍服の男が近づいてきて、引つたくるようにカメラを受け取った。

「では、明日」そう言い残し、武田はカメラを手に部屋の扉を押し開けて出ていった。

起き上がった床に足をおろすと、軍服のうちのひとりが僕の両手に手錠をかけた。金属特有の冷たさが手に伝わる。僕もこの状況で逃げようなどとは考えてもいないのだが、決められた手順なのだろう。

ふたりに追い立てられるように廊下へ出て、別棟に向かう。別棟の廊下の両側には同じような扉が数え切れないほど並んでいる。三〇七と表示された扉が開かれ、手錠が外された。僕は逆らわずに独房に戻った。背後で電気錠が閉じる音がした。

外側から鍵がかけられているのと少々狭い点を除けば、独房の住み心地は必ずしも悪くはない。僕は部屋の半分を占める寝台に仰向けに寝転がって目を閉じ、逮捕されて以来会うことがかなわずにいる仲間たちの顔を思い浮かべた。キム、亜由美、吉田、コースケ、ジョー、武史、奈緒子、田代、そして誰よりも玲奈。玲奈は今どうしているだろうか。彼女も同じように旅をさせられているのだろうか。

翌日、尋問があつた。窓のない殺風景な部屋には片側に三人並べるほどのテーブルが据えられ、僕は奥の壁側に置かれた椅子に座らされた。武田の手で、電線が繋がった金属の帽子を被せられる。軍服の男がふたり、扉の両側に立って拳銃を手にしている。昨日と同じ男たちなのかはわからなかつた。軍人の区別はつけづらい。

向かいに武田が腰をおろした。武田の隣にはもうひとり、いかにも将校らしい軍装の男が座っている。

「こちらは上野大佐」武田が横の男を手で示した。「この『計画の責任者ですよ』それから、上野を向いて「今回の被験者の新井浩です」言いながらテーブルの上で手を組んだ。

上野は目を細めてこちらを凝視したが、何も言わなかつた。

「写真を拝見しました」武田が言った。「二〇三四年とは素晴らしい。当たりを引きましたね。ほかの写真も上々です。で」と言葉を切る。「ほかに何か気がつきましたか？」

キムの書き付けのことは隠しておきたかつた。少し考えてから、僕は「あつちの世界ではロック音楽が許されてるみたいだつた」と言った。



「不道德だな」上野が吐き捨てるように言った。

「ほかに」武田。

「特に変わったことはなかったと思う」僕は答えた。

「おや」武田が指先でテーブルを軽く叩いた。「何もなかったということはないでしょう。嘘かどうかくらいは量子干渉計の信号で分かります。あなたは何かを見た。そうではありませんか？ 小屋に入らなかったんですか？」わずかに身を乗り出した武田が眼鏡越しににやりと笑う。

キムの書き置きのことを言っているのは明らかだった。知られているのだ。

「ああ」と僕は言った。「忘れていただけだ」下手な言い訳を口にする。「書き置きを見つけた」

「誰が残したものだね？」上野が口を挟んだ。

「一緒に逮捕されたキムだ」

「やはり見ましたか」武田が感嘆したような声を上げた。

「キムはどうしてる？」武田に問いかけた。

「とても残念なことをお知らせしなくてはなりません」武田は言葉を切つて、わざとらしくため息をついてみせた。「五回めの旅でした。彼は廃人になつてこちらの世界に戻つてきたのですよ。我々の問いかけにも全く答えない。ただ、痙攣し続けるだけでした。徹底的に検査をしましたがね、完全に精神が崩壊していた。最後は安楽死してもらいましたよ。悲しいことですが、しかたありません」

その言葉に僕は動揺を隠せなかった。

「最初にも申し上げたとおり」僕の様子を気にする風もなく、武田が続ける。「旅を重ねるごとに滞在時間は長くなります。あちらの世界の物質と量子相関が形成されるからだ和我々は考えています。まあ、量子相関といつても、おわかりにならないでしょうが。とにかくそのせいで、ひとりの人間がこちらの世界に行ける回数には限りがある。これまで何度も試しましたが、ほとんどの人は五回が限度です。まれに五回めを無事に生還する人もいますが、六回めを乗り切れた前例はない」

「キムはどうして」僕は呟いた。

「五回めの旅から戻るときに、そう、比喩的に言うならふたつの世界に引き裂かれたのでしよう。精神が量子相関のいわば張力に耐えられなくなると我々は考えています。これまでの実験によれば、十

人中九人は五回めあるいは六回めの旅から精神崩壊の状態に戻ってきました。持ち物や写真や量子干渉計の信号から引き出せるだけの情報を引き出しますが、たいした成果はありません。あなたも四回目までに何か素晴らしい情報を持ち帰るといい。そうすれば、五回目の旅の代わりに、いい待遇を差し上げられるかもしれません。あくまでも可能性ですがね」そう言って、僕を見つめる。「二六歳ですか。人生はこの先まだ長い。そうは思いませんか？」

「残りの一割は？」その言葉に思わず僕は聞いた。「残りの一割はどうなる？」

「最後の旅から戻ってきません。あちらの世界との量子相関が強くなりすぎるのでしよう。あちらでどうなったのか、我々には分かりません。あちらに留まったまま、量子相関の張力に引き裂かれたのだろうと想像はしていますが」と肩をすくめる。

僕は身を乗り出しかけた。「つまり、もしかしたら逃げられる可能性が一割あるかも知れない

とっ。」

「それを分がいい賭けだと思われるのでしたら、そうなのかもしれませんね。単にどっちの世界で廃人になるかだけの違いに過ぎないと思いますが、我々にとってはどうでもいい話です。戻らなかった人間が死んでいようが生きていようが、どのみち役には立ちません」

武田の言葉には何かしら含むものがあるように思えた。どうでもいいというのはごまかしかもしれない。

もちろん、反体制派ならその一割に賭けるだろう。言われた通りに情報を持ち帰って回数を稼ぎ、五回目にもうひとつの世界で生き残る可能性に賭ける。そうして機会を待つ。たぶん、キムもそうしたのだ。

「我々はもうひとつの世界と安全に行き来する方法を模索しているのですが」武田が続ける。「何かしら本質的な飛躍が必要です。量子相関をうまく制御できるようにならなくては。だから、我々は毎回少しずつ装置の設定を変えてみえています。もしかすると、あなたに適用した設定が当たりかもしれないですね」そう言って、眼鏡の奥で小さく笑った。

「今日はここまでだな」上野が口を開いた。

武田が頷く。扉の脇に控えていたふたりの男が歩み寄ってきて、僕の両腕をそれぞれ掴んで立ち上がらせた。手錠がかけられ、ふたりに追い立てられるように廊下へ出て、再び別棟に向かった。

「時間は制御できないんですよ、新井さん」初めて会ったとき、男は「主任研究員の武田です」と名乗って、そう言った。

やけに丁寧な口調だったが、この口調がこの男なりの恫喝だと気づくのに時間はかからなかった。そこはのちに尋問が行われるのと同じ部屋で、扉を背にして座る武田の両側には軍服の男がふたり立って、油断ない様子で拳銃を手にしている。

僕はテーブルを挟んで、武田と向かいあつて座っていた。身を乗り出せば手が届きそうだったが、その瞬間に撃ち殺されただろう。

「どの年のどの日に到着するかは個人差です」武田が続けた。「だから、日付けが分かるもの、そうだな、新聞があれば新聞でもいいから、持って帰ってください。あとは写真を撮って」

「ちよつと待ってくれ」と僕はさえぎった。「話がさっぱりわからないんだ」

「おや」と武田は首を傾げた。「もしかして、J計画の説明は聞いておられない？それは係のものの怠慢だなあ」そう言つたため息をついた。「まあいい、新井さんには別の世界に行つていただきませう」

「別の……世界？」

「ご安心ください。そうめつたやたらと違う世界ではありませんよ。今と……そう、少しだけ違う日本です」

「違う日本……とは、なんのことだかさっぱり」武田の雲をつかむような話に、僕は途方に暮れた。「並行世界はご存じですか？」武田が訊いた。

「科学者が可能性を議論してることくらいは」僕は答える。「僕たちの世界とは別の世界が、原理的にはあつてもおかしくないとか、その程度の話だろう」

「あるんですよ」武田がこともなげに言う。

「ある？」僕は聞き返した。

「これは重要な軍事機密ですが」武田が続ける。「我が大日本帝国の物理学者たちはひとつの並行世界を発見しました。目的を持って探していたわけではなく、量子計算機の実験を進めていた時にたまたま発見したのですがね。並行世界が存在するとしか解釈のしようがなかったのです。我々はこれを世界に先駆けて利用したい」

「どうしてそんな軍事機密を僕に明かす？」困惑して尋ねた。

「それはね」武田が眼鏡越しに僕を見つめる。「この実験の終わりには、あなたは九分九厘この世界に生きて戻れないからです」

「人体実験ってことか」僕は椅子の背もたれに体重を預けた。

「人聞きの悪いことを言わないでいただきたいですね」武田がなおも言った。「あなたは別の世界に向かう名誉ある先遣隊のひとりです。帝国への奉仕ですよ。どうです、うれしくありませんか？」

武田は並行世界についてそれ以上詳しくは語らなかつた。とにかく僕たちが暮らす世界とは別の世界がどこかにある。そこになんらかの意味で量子力学的な方法で移動できる技術ができています

い。大日本帝国の科学者たちはその世界に行つて戻つてくる方法を模索しているが、まだ完全ではないようだ。僕たちのような反体制派はその実験台としておあつらえ向きというわけだ。

武田によれば、その世界のどの日に到着するかは人によつて違ふのだという。

「時間は制御できないんです」武田が再び言った。

「制御できないつて、行つてみるまで分からないのか？」僕は聞いた。

武田が頷く。僕は必死になつて考えをまとめようとした。

「ということは」僕は口を開いた。「戦国時代の合戦のただなかに放り出されるとか」

「ああ」武田が微笑んだ。「それはご心配には及びません。今までのところ、いちばん過去で四十年ほど前、いちばん未来で七年後です。とんでもない時代には行きません」言葉を切る。「どうやら未来には行きづらいようです。しかし、我々は未来の科学技術の情報が欲しい。新井さんができるだけ未来に行くことを期待していますよ」

実験は三日後だった。僕は機械に囲まれた寝台に固定され、頭からすっぽりとマスクを被せられた。



「最初の旅はあつという間です」スピーカーから武田の声が聞こえた。「時間を無駄にしないように。よい旅を」

暗闇の中で機械が起動する音が聞こえ、意識が遠のいた。

尋問があつた夜、玲奈の夢を見た。空間が不自然に歪んではいたものの、そこは僕がかつて学生時代に住んでいた安アパートに違いなかった。だとすれば、ふたりともまだ二十代になつたばかりのはずだ。

僕たちは布団の上で裸で抱き合っている。玲奈の背中の手触りを感じる。僕は玲奈の唇に自分の唇を重ねようとするが、どうしても近づけない。彼女も顔を寄せようとしているのに、ふたりの顔の距離はいつこうに縮まろうとしない。抱き合っているはずなのに、近づこうとすればするほど、遠ざかっていくかのようだ。彼女の口が「ひろし」と動くが、声は聞こえない。

突然、視点が切り替わって、僕は抱き合ったまま動かないふたりを見下ろしている。玲奈の肌には汗が浮かんでいる。

そこで目を覚ました。枕元の時計を見ると、まだ夜中の二時を回ったところだった。手のひらに玲奈の汗の感触が残っていた。

あの頃の僕たちはなんの変哲もない普通の恋人同士で、軍政に批判的な言葉を口にしがちなのはどちらかといえば僕よりも玲奈のほうがだった。

「わたしたちは民主主義を目指すべきよ、アメリカのように」彼女はよくそう言った。

「そうだね」と僕は相槌を打つ。

あれは僕が大学を卒業する直前だったと思う。ひとつ歳上の玲奈は先に大学を出て銀行で働いていた。僕たちは激しく愛し合い、それから布団にくるまって抱き合ったままお互いを見つめていた。

「一九六九年」僕は言った。「あの時の民主化闘争は激しかったと聞くね。学生や労働者が一斉に蜂起した」

「そして徹底的に弾圧されたのよ」彼女が言った。「大日本帝国史上最大の民主化闘争は二か月ほどであっけなく終わった。民主主義は負けたの。たくさんの人たちが捕まったり殺されたりした」

「そのあとは一九九五年の小規模な闘争」

「二〇一一年に東北大地震があつたあと、軍部の支配は前よりも強固になつたわ」

そのあと、僕たちは起き上がり、黙つてビールを飲んだ。そんなことが時折繰り返された。僕たちは愛し合っていただけでなく、社会に対する諦めも共有していたのだ。

初めての旅からきつかり十日後、僕は再び例の機械の部屋に連れていかれた。

「二度目ですから」武田が言った。「滞在時間が延びるはずです。半日ちよつと予想しています。東京に行つてみてください」

武田が小さな財布を手渡した。「お金はこの中に」

「ちゃんと使えるのか？」僕は半信半疑で訊いた。

「七年後の世界から持つてきた紙幣を正確に複製しました。なかなか大変でしたけどね。十二年後にも現行通貨かどうかは保証できませんが、使えないことはないでしょう」

僕は再び寝台に固定され、武田の合図とともに意識が遠のいた。

目を開けると、前回と同じ林にいた。やはり午前中のようだ。キムの書き置きを見つけた小屋は同じ場所にひっそりと佇んでいる。

林を抜けて商店街に出る。風景は前回来た時とほとんど変わっていない。ロックフェステイバルのポスターもそのままだ。僕たちの世界で十日経った分だけこちらの世界でも同じ時間が経っているのかもしれない。

試しに目を惹いた小さな商店に入ってみることにした。近づく自動扉が開いた。店の中には聴きなれない音楽が流れ、たくさんの棚に雑誌や日用品や食料品が並んでいる。奥には透明な扉の奥に飲み物の缶や瓶が見えた。飲み物にひとつ百円以上の値札がつけられているのはやはりまだびっくりする。

ジュースらしい飲み物と菓子パンを取り、恐る恐る贖の一万円札とともに出してみた。店員はちよつと怪訝な顔をしたが、「当店のアプリはお持ちですか？」と訊いてきた。なんのことかわからず、「いや」とだけ僕は答えた。

店員が札を自分の手前の機械に入れる。札が戻ってくるのが見えて、自分の心臓の音が聴こえる気がした。店員は札をとって裏表を確かめ、折れ目をなおすと、もう一度機械に投入した。今度はなにごともしなかつたようで、「九四七二円のお釣りで」と言いながら、お釣りをよこした。これで、この世界の正規の金が手に入った。

甘ったるいパンを齧りながら商店を覗いて歩き、食べ終えた頃に前方に小さな駅が見えた。

武田からは都心に行つて写真を撮つてこいと言われていた。駅に掲げられた路線図を見て、渋谷ならいいだろうと当たりをつける。見慣れない硬貨と慣れない自動販売機にちよつと苦労したものの、それでもなんとかプラスチックの切符を手に入れた。

時折、改札を入つていく客がいる。それを眺めていたが、切符を使う人はおらず、改札などないかのように構内に入つていく。少し途方に暮れていると、僕が持っているのと同じ切符を機械に押し当てて入つていく人がいた。僕は真似をして、駅構内に入った。

手入れが行き届いた電車に揺られて東京に向かった。色とりどりの華やかな服を着た乗客たちの中で、自分の地味な色の服が妙に気になった。大胆に肌を出している女性も少なくない。みんながこちらを見ているようで落ち着かなかったが、気のせいだと自分に言い聞かせる。

電車を乗り換えるのに、少し手間取った。渋谷で電車を降り、再び切符を機械に押し当てて改札を出る。渋谷の駅前には僕の世界の渋谷と同じように人でごった返していた。大きな声が聞こえるほうを見ると、ビルの壁に大きなテレビ画面が輝いて、音楽に合わせて踊る人たちが映し出されている。派手に飾りつけられたビルが並ぶその街は、僕が知っているくすんだ色の渋谷ではなかった。

僕はあてもなく歩きながら、写真を撮って回った。百貨店のような大きな店にも入ってみた。この世界の人々が身につけている華やかな服が飾られている。路地裏で安そうな食堂を見つけて、定食とビールで早めの夕食を済ませ、それからまたしばらく歩き回った。

深夜の渋谷駅前はいつまでたっても明るく、人が途切れない。いかにも酔ったように大声を上げる人もいる。こんな渋谷の夜を見るのは初めてだった。日が変わって一時間ほど過ぎただろうか、笑い

ながら歩いていく派手な服装の若者たちを眺めていると、ふっと意識が薄れ、僕は元の世界に引き戻された。

大学を出ても就職口はすぐには見つからず、知り合いが経営する店でアルバイトをして暮らしていた僕は、店の常連客に紹介されて新宿のバーで雇われマスターとして働き始めた。カウンターがあるだけで十人も入れればいっぱいになるようなバーでも、僕には初めての定職だった。接客が向いていたのだろうか、いろいろな客がやってくるバーはなかなか面白かった。

「あなたがそういう仕事に向いてたなんて意外ね」と玲奈が笑った。

安アパートを出て集合住宅の一室で玲奈と暮らし始めた時、会社勤めの玲奈のほうが稼ぎがよかったが、彼女はそれで構わないと言って、家賃の大半を出してくれた。バーを開けている日は日が変わる頃に家に戻るの、玲奈とはなかなか時間が合わなかった。それでも僕たちは機会を見つけては一緒に出かけ、休日前の夜は深く激しく愛し合った。

あれはバーに勤めはじめて一年ほど経った冬だ。たまたま客が途切れてひと休みしていたところへ、扉が開いて灰色のコートに黒いマフラー姿の男が入ってきた。

「いいかな」それが男の第一声だった。

「どうぞ」と答える。

男がマフラーを取り、コートをハンガーにかけてからカウンターの端の椅子に腰をおろし、顔を上げた。その顔を見て、僕は思わず「あつ」と声を上げた。

男は怪訝そうな顔をしてこちらに目をくれたが、すぐに「ひろし……か？」と言った。

「そうだよ、新井浩だよ」僕は笑って答えた。幼なじみのキムとの再会だった。最後に会ったのは大学に入る前だ。

店を臨時休業にして、家にいる玲奈に電話をかけた。

「あれからどうしてた？」キムが訊いた。

「東京の大学を出ても職がなくてね、知り合いからこの仕事を紹介してもらったんだ」僕は答えた。

「キムこそ、どうしてた？」



「働いてるよ、新聞社だ」財布から名刺を取り出してこちらに寄越す。

「大手じゃないか」僕は感嘆の声を上げた。

「体制の手先だけどね」自嘲気味に笑う。

僕たちが幼なじみ同士に戻るのに時間はかからなかった。しばらく話していると、玲奈がやってきた。キムに玲奈を紹介して、その晩は終電間際まで三人で話し込んだ。

翌週、キムは恋人の亜由美を連れて店に現れた。

「一緒に住んでるんだ」キムが言った。

それからキムは頻繁に僕の店を訪れるようになった。吉田もコースケもジョーも武史も奈緒子も田代もキムが連れてきた。友人が少なかった僕に突然たくさん友人ができた。玲奈と亜由美はすぐに意気投合して、男たちの悪口を言い合うようになった。

そんなことが一年ほど続いた冬の夜、他に客がいないのを見計らって、キムがいつになく静かな声で「話がある」と言った。そうして、僕と玲奈は反政府活動に足を踏み入れることになった。反政府

といつても、ごくささやかな活動にすぎない。それでも、決して人に明かしてはならない秘密だった。

二度目の旅の翌日、また同じ部屋で武田と上野の尋問があった。

「東京はどうでした？」武田が眼鏡越しに僕を見つめる。

「そうだな……持っていった金は問題なく使えた。今回は電車に乗って渋谷に行った。渋谷はこちらの世界と変わらず人が多かったけど、なんというか、ずっと華やかだった」

「うらやましかつたですか？」武田が言った。「なに、大日本帝国も技術の力でさらに繁栄させますよ。それが私たちの仕事ですから」

「繁栄というか」僕は口ごもった。「自由な雰囲気だった」

それまで黙っていた上野が口を開いた。「自由なら、君たちにも十分に与えているはずだ。大日本帝国に忠実である限り、君たちは自由だ」

僕は言葉を返さなかった。

「話題を変えましょう」武田がとりなすように言った。「どうでしたか、あちらの科学技術は」

「電車は無人運転だったけど、動く仕組みはそれほど違わないかもしれない」僕は答えた。「自動車は見慣れない形をしていたから、自動車の技術はもしかすると相当進んでいるのかもしれない。ほかに」考えこんだ。「そうだ、渋谷の町のいたるところに大きなテレビがあつて、宣伝のようものが流れていた」

「資本主義的ですか。技術の無駄遣いに思いますが」武田が言う。

僕は深夜の渋谷を歩く若者たちを思い起こした。彼らの様子は上野がいう自由とは何かの本質的に違っていた。

「我が大日本帝国に必要なのはね、新井さん」武田が続ける。「科学技術です。世界に先んじる科学技術だ。あちらの世界に行くのも、最先端の科学技術を手に入れるためです」

僕は何も言わなかった。

「我々には量子技術がある。あちらの世界を見つけている国はほかにありません。これを利用しない手はない」

「ほかの国も知ってて隠してるだけじゃないのか？」僕は訊いた。

「そうですね、もちろんその可能性はないわけではない。しかし、この分野で我々は世界に相当先んじていると確信しているのですよ。いいですか」武田が言葉を切った。「大日本帝国は名前こそ帝国ですが、小さな国です。大国ソ連とは欧州大戦の際に対独戦を物資面で支援して以来、表向きは友好的にやっています。ソ連の指導を受ける中国ともね。あの頃、毛沢東なんていう癖ものをスターリンはよく手懐けましたな」

突然演説を始めた武田になかば呆気に取られながら、僕は頷いた。

「そうですねえ」武田が続ける。「満州まで行ければよかったです、ソ連の目がありましたから。まあ言っても宣のないことです。朝鮮半島を取れただけでも上出来とすべきでしょう。もうひとつの大国アメリカ合衆国とは緊張関係にある。国際連盟もあまり役には立ちませんね。しかし、欧州大戦のようなことは二度と起きないでしょう。おわかりですよね」

「核……」僕はつぶやいた。

「そう、次の大戦は核戦争になる。どの国もそれだけは避けたいわけです。大日本帝国だって、その気になればすぐにでも核弾頭を積んだロケットをアメリカに撃ち込めますよ。でも、もちろんそんなことはしません。核兵器はいわば使わないための兵器です。我々は戦争ではなく科学で世界一になります。あなたがたにはそのための捨て石になってもらおう」

「武田さん」上野が言った。「あまり口を滑らせないように気をつけてもらいたいな」

「おっと」武田が大袈裟に口を押さえた。「喋りすぎたようです。まあいい、最初の二回は練習ですから。次の旅は三日ほど続きます」

「どうして、少しずつ長くする？ 最初から一か月にでもすれば」僕は訊いた。

「既に申し上げたはずですが、これは我々が決めているわけではないのですよ」武田が答えた。「滞在時間は勝手に決まるのです。おそらくあちらの世界との量子相関が強まるにつれて、滞在時間が延びるのでしょう。量子相関にはいい点と悪い点がある。いい点はあちらの世界に行けることです。量子計算機が量子相関を見つけたから、我々はあちらに人間を送り込めるようになりました。悪い点は」

「量子相関が強くなりすぎると、ふたつの世界で引き裂かれる、か」僕は言った。

「よくわかりです。次回からが本番ですよ。情報を集めて来てください。未来の科学技術の情報をね」

僕たちは全国に散らばる同志たちと細い連絡網を維持していた。電話線を経由した違法な電子連絡網だ。公安の盗聴を回避するために複雑な暗号が使われた。とはいっても、それぞれの組織は小さな細胞に過ぎず、すぐに蜂起するなどといった大それた計画は持ち合わせていなかった。そんなことをしても瞬く間に軍に制圧されただろう。一九六九年の大規模な一斉蜂起ですらそうだったのだ。

それでも、民主化を求める違法なビラを作り、密かに街なかには貼って歩いた。キムは家に印刷機を隠し持っていた。少しずつでも仲間を増やし、いずれは蜂起して民主化を成し遂げる。それが僕たちの願いだった。僕のバーが活動の拠点になった。定休日にバーに集まり、酒を飲みながら、いつ実現するとも知れない夢のような民主化闘争を語り合うのだ。

それ以外は相変わらずだった。僕と玲奈はささやかだが幸せな生活を築いていた。僕は玲奈を愛していたし、玲奈も僕を愛してくれていた。僕はいずれは自分の店を持ちたいと考えるようになっていった。

秋も深まったあの日、例によって僕のバーには三々五々仲間が集まってきた。

「あとは吉田さんだけね」ウイスキーを飲みながら奈緒子が言ったその時、扉が勢いよく開いて、つんのめるように男が飛び込んできた。

「す、すまん」男があわただしく言った。吉田だった。

入り口を見ると、黒いコートの男がふたり、ゆつくりと入ってくるころだった。ふたりの手には拳銃が握られ、銃口がこちらを睨んでいる。

「気をつけていたはずなのに……つけられてるのに気づかなかった」吉田が息を切らせながら言う。

僕たちは入り口を向いて、おずおずと両手を上げた。

二度目の旅からまたきっかり十日後、例の装置が置かれた部屋に連れてこられた。

「先日申し上げたとおり、三回目の旅は三日間ほど続きます」武田が言った。「ホテルに泊まってください」

「ホテルとなると身分証が要るだろう」僕は答えた。

「二〇二九年には金さえ払えば身分証なしでも泊めてくれるホテルがあったようですから、たぶんあるでしょう。自力で探してください。それに」と言葉を切る。「万が一なんらかの理由で逮捕されたとしても、三日後には自動的にここに戻ってきますよ」そう言って、くっくつと笑った。

マスクを被せられ、寝台に寝かされた。金属音がして、腕が固定される。スイッチを入れる音とともに体がふつと軽くなった。

気がつくくと、いつもの林に立っていた。なんとなく違和感を覚えたが、今回は鞆を肩から掛けているせいだと気づいた。躊躇うことなく小屋に歩いていき、扉を開けて中に入る。キムの書き置きは机の上にそのまま残されていた。僕はポケットから手帳とペンを取り出して、手帳を一枚破り、キムの紙の横に置いた。



『同志へ。今は二〇三四年だ。とにかく生き延びろ。五回目を生き延びる確率は一割だ。それを信じろ。新井浩』そう記して、小屋を出た。

町に下りて、まっすぐに駅に向かう。駅の路線図を眺めて、今回は新宿に行ってみることにした。最後は山手線に乗ればいい。僕の世界と同じだ。

今回も乗り換えに少し手間取ったものの、一時間ちよつとで新宿に着いた。新宿東口は人であふれていた。渋谷とはまた少し違う雰囲気を感じたが、やはり派手なビルが立ち並び、華やかな服に身を包んだ人たちが賑わう街には外国人の姿も多い。僕の世界の新宿と同じなのは行き交う人が多いことだけだ。僕は目についたものを片っ端から写真に収めていった。

狭い路地を覗くと、ホテルの看板がいくつも見えた。なるべく目立たない一軒を選んで入り、「二泊したい」と言った。

受付の女が無愛想に「連泊は受け付けてませんよ」と答えた。どうやら連れ込みの類이었다らしい。

それでもしばらく歩いて、新宿のはずれに安く宿泊できるホテルを見つけた。驚いたことに身分証などそもそも必要なく、偽りの住所と名前を書いて金を払うだけでよかった。僕はこの世界では人間の管理が緩いことを知った。部屋は洋室で、部屋のほとんどを寝台が占拠している。靴を脱いで寝台に横になり、かりそめの開放感に浸って二時間ばかり過ごした。その夜はホテルの近所で見つけた小さな食堂で夕食をとった。

ホテルの受け付けで科学技術の展示をしている場所をいくつか教えてもらい、翌日と翌々日の二日をかけて都内を歩き回った。電車の路線に少し戸惑いはしたものの、地名はそれほど大きくは違わない。見知った地名に見慣れない街並みが次から次へと現れた。

科学博物館と科学未来館にそれぞれ半日を費やした。本当の意味での最新技術はそんなところに展示されていないのだろうが、それでも十二年後の技術だ、見慣れないものがたくさんあった。特にエネルギー関連と交通関連の技術は相当進んでいるように思えた。量子技術も盛んに研究が進められているようだ。片っ端から写真を撮り、解説書などを集めた。

新宿で大きな書店にも入ってみた。技術書の棚は題を見ても意味がわからない本ばかりだった。途方に暮れて、とりあえず題に『量子技術』が含まれる本を十冊ばかり買い込んだ。夕食は毎晩同じ食堂ですませた。

最後の日、目を覚ましてカーテンを開けると眩しいほどの朝日が輝いていた。集めた本や資料を詰め込んだ鞆を抱えてホテルを引き払った僕は、近くで見つけた小さな喫茶店に入って、店主らしい四十代くらいの女性に「コーヒーをひとつ」と声をかけ、席についた。本を一冊鞆から取り出してぱらぱらと眺めてはみたものの、文字が簡略化されていて、字面を追うだけでも大変だった。もちろん、すらすら読めたとしても、専門書なので意味はほとんどわからなかつただろう。あきらめて本をしまいいこんだところへコーヒーが届けられた。

窓の外を行く人の波をぼんやり眺めながら、コーヒーに口をつける。ふと目を前に向けると、テーブルひとつ隔てた席の女性の前にカップが置かれるところだった。

女性が顔を上げたのを見て、はっとした。「玲奈……」思わず呟いた。だが、玲奈ではなかつた。

他人の空似だ。玲奈のことは片時も頭を離れない。ちよつとでも面影が似た女性を見かけると、心臓

の鼓動が速くなる。二十代半ばくらいだろうか、黒っぽいワンピースを身につけ真っ黒な髪を肩まで伸ばした彼女は僕が見つめていることに気づいたのか、顔を伏せた。

店を出てしばらく歩き、眩しい空を見上げた次の瞬間、体が浮き上がる感覚とともに意識が薄れた。

いつものように尋問は翌日行われた。

「たくさんの写真をありがとうございます」と武田が慇懃に言った。「我々は未来の技術ならなんでも知りたいのですよ。あなたが持ち帰った資料は実に興味深い」

「それはなにより」僕は言った。

「量子技術の書籍はあちらの現状がよくわかる。十二年後といっても、今の我々のほうが進んでいるところも多いようです。詳細な分析はこれからですが。いや、実に興味深い」最後の言葉は武田が自分に言い聞かせているようだった。

「ほかのみんなもあつちの世界に行ってるのか？」僕は訊いた。

「みんなとは？」 武田がとぼける。

「一緒に捕まった仲間だ」

「君の仲間のことは教えられない」 同席していた上野が口を開いた。「ひとり死んだことは聞いたはずだが」

「玲奈は、玲奈はどうしてる？」

「教えるわけにはいかない」 上野が取り付く島もない口調で答える。

「僕たちは何もしてないじゃないか」 僕はつぶやいた。

上野が僕の顔を見つめた。「君たちは政治犯なんだよ、新井。政治犯の罪は重い。はっきりさせておこう。君たち全員にJ計画のために働いてもらう。誰が今どうしているかは教えられないが、遅かれ早かれ全員が五回めの実験に臨むことになる。君も含めて」

「資料を持って帰れば放免してくれるんじゃないか」と抗ったが、その声は弱々しかったはずだ。

「政治犯とは何も約束しない」 上野が断固とした口調で答えた。

沈黙が流れた。

「さて」武田が話題を変えた。「ほかに何か気づきませんでしたか？」

僕は少し考えこんだ。華やかな街とそこに行く人々の賑わいはこの世界とはずいぶん違っていたが、それだけではない違和感がずっと残っていた。

「気づかなかったんですか」武田が呆れたような声を出した。「あなたが行った世界はね、大日本帝国じゃないんです」

「どういう意味だ」僕は思わず声を上げた。「僕は間違いなく渋谷にも新宿にも行った」

「それはそうなんですが」武田はテーブルの上で手を組み直した。「あちらの世界でこの国は日本とだけ呼ばれています。帝国ではないんですよ。これまでの調査によれば、朝鮮半島と南樺太は日本の領土ではありません」

「それは」言いかけたものの、言葉が続かなかった。

「大日本帝国は未来の技術を必要としています」武田が続ける。「ソヴェエト連邦率いるワルシャワ条約機構とアメリカ合衆国率いる北大西洋条約機構の冷戦は長く続いています。我が国はワルシャワ

側と友好的とはいっても同盟関係を結んでいるわけではありません。ソ連の指導下で社会主義国家になるなど、我が国の選択肢にはない。大日本帝国はあくまでも天皇陛下を戴く独立国家ですから」そう言つて、眼鏡越しに僕の顔を見つめる。「二大勢力と適当なバランスを取りつつ独立を保つ我が国に必要なのは圧倒的な科学技術力です。技術力がなければ、ソ連との関係だって、近い将来どうなるか分かったものじゃない。それでなくても、南樺太の領土問題は水面下でずっとくすぶっていますしね。幸い、我が国には高い量子技術があります。それを使ってあちらの世界から未来の技術を手に入りたい。まずはふたつの世界を自由に行き来できるようにしなくてはなりません。あなたがたにはそのための実験台になつてもらおう。政治犯が帝国に奉仕する数少ない機会ですよ」

独房に戻つた僕は冷たい寝台に寝転んであれこれと考えを巡らせてみたが、どう考えても五回目を生き延びられることに賭けるほかに道はなさそうだった。五回目に戻つてこない可能性が一割。戻らないとどうなるのかは誰も知らない。あちらの世界で廃人になるだけかもしれないが、それでもそこにしか希望は見出せない。

その夜見た夢の中で、玲奈はふたつの世界の量子相関に引き裂かれていた。玲奈の苦悶の表情を目にした僕は声を上げようとしたが、ただ口だけが動いて、音にならない。飛び起きると、体じゅうに汗をかいていた。枕元の時計は明け方の四時半を指していた。

旅と旅の間はいつでもきっかり十日間空けられる。理由は分からないが、この几帳面さはいかにも軍部らしい。

独房の中では、差し入れられる層のような本を読むか体操をするくらいしかやることがない。僕は『大日本帝国の栄光の歴史』とかそんな感じの題が付けられた本を何冊も読み流して、いい加減嫌になつていた。あとはベッドに寝転がって仲間のこと、とりわけ玲奈のことを考えて過ごした。玲奈がどうしているのか、そればかりが気がかりだった。

四回目の旅は一週間続くと武田が言った。

「どうして世界はふたつしかないんだ？」僕はマスクをかぶせられて寝台に固定されたまま、思いついた疑問を口にした。



「無数にあると思いますよ。そういう理論はあります」武田が答えた。「あなたが訪れたあの世界が我々の世界ととりわけ近いのかもしれませんが。あるいは、たまたま我々の装置があの世界と繋がっただけで、たいした理由などないのかもしれない。どうしてひとつの世界にしか行けないのかはまだ分かってないんですよ。まだまだ調べなくてはなりません。だから、あなたがたに行ってもらおう」

その言葉が消える前に意識が薄れ、気がつくと僕は林に立っていた。足もとに一週間ぶんの着替えが入った大きな鞆が転がっている。いつも通り、こちらの世界では午前中のようなのだ。

町に降り、今やおなじみになった電車に乗って都心に向かう。今回は長丁場だから後半は東京を離れて関西にも行ってみようというのが漠然とした計画だった。四回めまではなるべくおとなしく命令に従うしかない。

山手線に乗り換え、新宿駅で降りて、人でごった返す南口を出た。

目の前に白いワンピース姿の彼女がいた。

「ずいぶん待ったわ」彼女が微笑んだ。

「いつここに着いたの？」玲奈に案内されて、静かな喫茶店の柔らかな椅子に腰をおろした僕は、コーヒーが来るのも待ちきれずに尋ねた。

「二〇〇九年。二十五年前よ」玲奈が答えた。

「二十五年も」僕は思わず声を上げた。

たしかに、向かい合って近くで見ると、彼女の目尻には少し皺ができ、長く伸ばした髪の毛の生え際にも白いものが混じっている。それでも、目の前にいるのはまぎれもなく玲奈だ。僕は彼女をじっと見つめた。玲奈も見つめ返す。

「どうして僕が来るとわかった？」僕は訊いた。

「あの林にカメラを仕掛けてあるの。人が来たら自動的に記録するようになってる。一か月前に初めてあなたが現れるのを見た時はうれしかったわ。あなたが四度めにやってくるのは今日だと思ったから、朝から娘にあそこを見張ってもらってたの」

「娘？」僕は思わず聞き返した。「そうだね。二十五年もあれば、結婚して子供がいるのも当然か」  
声に落胆が含まれるのを隠せなかった。

「あら」玲奈は小さく笑った。「何を言ってるの。あなたの娘よ」

僕は言葉を失った。

「喫茶店であなたに顔を見られたと言っていたわ」玲奈が続ける。

「ああ」僕はあの時の若い女性の顔を思い出した。「一瞬君かと思ったんだ」

「あとで会わせるわ」玲奈が言った。「わたしは結婚してないの。どのみちあの世界のことを話したって、誰にも信じてもらえないじゃない。子供を育てて、仕事をして、気がついたら二十五年経ってた。それに」とコーヒーを口に運ぶ。「あなたを忘れたことはなかった」

「そうか」僕は気持ちが軽くなるのを感じた。「キムには会った？ 二〇二〇年に来たはずなんだ」玲奈が頷いた。「会ったわ。カメラを仕掛けてすぐだった。キムさんが五度めにここに来た時に会って話した。わたしを見てずいぶん驚いてた。当然よね。でも、彼は戻ってしまった」

「キムは死んだよ。ふたつの世界に引き裂かれて、廃人になって戻ったそうだ」

「そう」玲奈は淡々と言った。こちらの世界に残れなければ、無事でいられる可能性はほとんどないと知っているのだ。

「君は五度めにこっちに残ったんだね」僕は言った。

「そう。二度とあなたに会えないまま死ぬと思ってた。でも、わたしはあつちに戻らなかった」

「どうしてだろう。それが分かれば」

「分からないわ。分かるとも思えない。もしかすると、お腹に子供がいたことと関係あるのかもしれないけど、どうかしら」玲奈は首を傾げた。

玲奈に連れられて電車に乗り、下北沢にある彼女の家のソファに落ち着いた。こぎつぱりとした集合住宅の一室をこの世界ではマンションと呼ぶことを僕はこの時に知った。玲奈が冷蔵庫からビールを出してきて、低いテーブルを挟んだ向かいの椅子に腰を下ろした。ふたつのグラスにビールを注ぐ。僕たちはグラスを合わせた。

「今までどうやって？」ビールをひと口飲んでから、僕は訊いた。

「五回めにここに送り込まれたとき、二週間で戻ると言われていたの。だから、二週間で死ぬんだと思った。怖かったわ。それで、思い立って上野のお寺を訪ねたの」玲奈が語り始めた。

玲奈が子供の頃からよく知っている小さな寺だという。そこには見知らぬ住職がいたが、住職の奥さんが親身になって話を聞いてくれた。

「別の世界から来たことは伏せて、あとは本当のことを話したの」玲奈が続ける。「どこでどうやって育ったとか、お寺には子供の頃に何度も来て、別の住職を知ってるとか、ささやかな反政府活動に関わって逮捕されたこととか」

「この世界では辻褄が合わないだろう」僕は言った。

玲奈が頷く。「頭がおかしいと思われたわ。記憶が混乱してると。それから、警察に連れていってもらって同じ話をした」

「警察？」思わず聞き返す。「危険じゃないのか」

「この世界の警察は大丈夫なのよ」と言っただけ玲奈がビールをひと口飲む。「警察で同じ話をした。調べてくれたわ。私の記録はなかった。戸籍もなにも。そうこうするうちに二週間が過ぎたのに、わたしはここに留まっていた。理由は分からないけど、助かったと思ったわ」

「こつちに残っても廃人になっているだろうと武田は予想してたけど」僕は言った。「こつちに残った人間に何が起きてるかはわからないからな」

「それから精神病院よ。お寺の奥さんは本当に親身になってくれた」

病院でも同じ話をした玲奈は、子供の頃から今までのできごとを詳しく話すことができた。話に矛盾はなかった。それはそうだ、実体験なのだから。だが、この世界の人たちからすれば、全てがおかしかった。

「記憶の混乱と考えられたわ。すごく奇妙な記憶喪失だろうって」玲奈が言う。

お寺の奥さんが親身になって相談に乗ってくれ、生活保護を申請してお寺の近くにアパートを借りた。精神病院に何度も通って記憶喪失が確定すると、家庭裁判所に申請して戸籍を作った。

「その間にもだんだんお腹が大きくなってきてね」玲奈が続ける。「産院もお寺の奥さんの紹介。戸籍ができたのは子供が生まれる直前だったわ。だから、あの子には最初から戸籍があるの」

「それから？」

「お寺の奥さんやいろんな人たちにお世話になりながら、しばらく生活保護で暮らした。職業訓練を受けて、コンピュータを学んだの。それから、やっぱり奥さんの伝手で仕事を紹介してもらって」  
いろいろあった、と玲奈は言う。ひとりきりで見知らぬ世界に放り出されて、子供を育ててきたのだから当然だろう。

「子供を抱えて東北大地震にもう一度遭ったわ。こっちではね、東日本大震災って呼ばれてるの。知ってる？ この世界では津波のせいで原子力発電所が爆発したのよ」

その言葉に僕は驚いた。「大丈夫だった？」

「東京はわりとすぐに落ち着いたかな。東北の復興には時間がかかったわ。壊れた原子力発電所はまだ処理できていないし」玲奈はグラスをテーブルに置いて立ち上がり、僕の隣に座った。

「大変だったね」僕は玲奈の目を見つめた。

玲奈は黙って顔を近づけてきた。僕は玲奈の肩に両手をかけ、彼女の唇に自分の唇を重ねた。長い時間、僕たちは舌を絡め合っていた。それから、彼女のワンピースのファスナーに手をかけた。

「待って」唇を離して彼女が言った。「こっちにきて」

そして、僕たちは寢室のベッドで長い時間をかけてお互いを激しく求め合った。玲奈のからだは記憶のままだった。玲奈は何度も声を上げた。彼女の目に唇を当てると、涙の味がした。

玲奈が用意してくれた夕食と一緒に食べて、それからまた愛し合い、そして抱き合って眠りについた。僕は明け方に一度目を覚ました。玲奈の寝息を聞いて安心した僕はすぐにまた眠りに落ちた。

翌日から玲奈の案内で東京近郊を見て回った。本当は貴重な時間を彼女とふたりきりで過ごしたかったが、「写真とか資料とかがいるでしょ」と彼女が言ったのだ。武田たちに怪しまれてはならない。

名古屋と大阪にもふたりで出かけた。訪れるべき場所は玲奈があらかじめ考えてくれていた。

「これでも日本の経済は伸び悩んでいるのよ」と玲奈は言ったが、僕には初めて目にするものばかりだった。夜はホテルのベッドでいつまでも愛し合った。

「この世界に僕たちはいないのかな？」大阪の喫茶店でひと休みしていた時に僕が訊いた。

「この世界に生まれたわたしたち？」玲奈が訊き返す。



僕は頷いた。

「調べたことがあるわ」玲奈が言った。「わたしと同じ人は見つけれなかった。あなたと同じ人もね。わたしの両親も見つけられなかった」

「ふたつの世界はどこまで同じなんだろう」僕は言った。

「歴史を調べてみたの」玲奈が答える。「明治維新はあつたし、大日本帝国もできた。でもね」と言葉切る。「その頃のことと少しづつ違うみたいなの。わたしたちの歴史には現れなかった人が重要な役を果たしたりしてる」

「でも、今のふたつの世界よりは似てる？」

「そう。だからね、たぶんふたつの世界は長い時間をかけて少しずつ離れてきたんだと思う。それがこの百年くらいで加速度的にどんどん大きく離れて、今の違いになったのよ」

「国の名前が変わったのはどうして？」疑問は次々とわいてくる。僕は訊きたい気持ちを抑えられなかった。

「この世界ではね」玲奈が答える。「日本が満州を属国にして、アメリカと戦争になって、欧州大戦は世界大戦になったの」

「大日本帝国は負けたのか」僕は言った。

玲奈が頷く。「こつちの世界の大日本帝国はドイツとイタリアと同盟を結んで、アメリカやイギリスと戦った。戦争の終わり頃には本土がアメリカに激しく爆撃された。東京も大空襲にあつたし、広島と長崎には原子爆弾が落とされたのよ」

「原子爆弾？ そんなものを使つたら……」僕は驚いて言葉を継げなかった。

「その当時、原子爆弾を持っていたのはアメリカだけだったから」玲奈は淡々と答える。「その前から日本の敗戦は決まっていたけど、原子爆弾が最後の決め手になった。この国はアメリカに占領されたの」

僕は頷くしかなかった。

「元号も違うわ。昭和までは同じ。でもそのあと、こつちの世界では平成っていう元号になって、今はその次の令和よ」

「待つて。ということは戦争に負けたのに天皇がいる？」

「権力は持つてないけどね。憲法も変わったから」

僕はしばらく黙つて、頭の中を整理しようとした。玲奈が僕をじつと見つめている。

「キムのほかに誰かに会った？」僕は訊いた。

玲奈が頷く。「キムさんの三年後にコースケさんが来たわ。わたしたちの仲間はそのふたりだけ。

他のみんなはわたしがカメラを仕掛ける前にこっちに来たんだと思う。それともまだ来てないのか

も。他には知らない人たちが、そうね、三十人くらいかな。キムさんとコースケさん以外の人とは直

接は会わなかったの」

「コースケはそのあとは？」

玲奈が目を伏せて、首を横に振った。

最後の日、マンションに娘がやってきた。あの日と同じ黒っぽいワンピース姿だった。

「浩子よ。あなたの名前を取ったの」玲奈が言った。

「ああ」僕は浩子に言った。「あの時はどうも」

浩子は微笑んだ。自分の娘と言われても実感はわかない。なにしろ僕と一歳しか違わないのだ。近くで見る浩子はたしかに若い頃の玲奈と似ていたが、見間違うほどではなかった。背も玲奈より高い。

「お父さんだなんて不思議。わたしの彼氏でもおかしくない歳なのに」浩子はそう言って、小さく笑った。

「君はどこまで知ってるの？」僕は訊いた。

「全部知ってるわ」浩子があつさりと答える。「娘だもの」

玲奈が僕の日を見つめた。「五回目ではとても落ち着いて話せないと思って四回目にあなたに会うことにしたの。でも、必ず戻ってきてね。そして、五回目を生き抜いて」

次の瞬間、意識が遠のいた。

「四回目も無事に戻れてなによりです」翌日の尋問で武田が言った。「名古屋と大阪の写真は興味深い。リニアモーター列車は我々も開発しているが、あちらではもう走っているのですね」

僕は頷いた。「まだ名古屋までしか開通してないけど」

名古屋と大阪の様子を中心に思い出せる限りのことを説明した。もちろん、玲奈に会ったことは秘密だ。

「ほかに何かありましたか？」武田が訊いた。

僕は東北大地震で原子力発電所が爆発事故を起こしたことを話したが、それは武田も知っているようだった。

「ほかに？」武田がなおも問いたです。

しばらく考えるふりをしてから、「特に変わったことはなかったと思う」と答えた。

「嘘だ」突然、武田が怒鳴った。そしてすぐにまたいつもの慇懃な口調に戻る。「量子干渉計の信号はあなたが何かを隠していることを示しています。忘れたのではなく、隠していることがあるはずですよ」

「隠してることなんか何もない。ほんとうだ」僕は答えた。

「いや、あちらで何かあったはずですよ。もしかして、お仲間に出会いましたか？」

「誰にも」僕は小さな声で言った。「誰にも会ってない」

それまで黙っていた上野が机を叩いた。大きな音がして、僕はびくつとした。

「隠すな」上野が大声で言った。「正直に言え。誰に会った」

「新井さん」武田が言う。「正直な話、あなたがたが持つて帰ってくる情報にそれほど多くを期待しているわけではないんですよ。我々はあちらの世界と自由に行き来したいんだ。自分の目で未来の技術を確認したい。もしあつちで生き延びている者がいるのなら、なんとしても知らなくてはならない」

「誰にも会ってない」僕は繰り返した。

「あちらの世界から戻ってきていないのは」武田が僕を指差した。「あなたの恋人だけです」

「玲奈には会ってない」僕はなお言い張った。

「嘘をつくな」大声を上げた上野の手にはいつのまにか拳銃が握られていた。銃口の奥から暗闇がじつとこちらを睨みつけている。「会っただろう」

「嘘じゃない」たぶん僕の声は震えていたに違いない。「嘘じゃない」もう一度言った。

上野の指が引き金にかかるのが見えた。僕は息を飲み、目をぎゅつと閉じた。脳裏に玲奈の顔が浮かぶ。「玲奈」と僕はつぶやいた。意識が遠のいた。

おそろおそろ目を開けると、そこは林の中だった。僕はその場に座り込んだ。呼吸が荒く、心臓は激しく鼓動を打っていた。

しばらくすると少し落ち着いてきて、木漏れ日が差しているのに気づいた。少し離れたところにはあの小屋が見える。間違いなくいつもの林だ。何が起きたのかわからないが、とにかくこちらの世界に戻ったのは間違いのないようだった。玲奈が仕掛けたカメラが見つけてくれているはずと信じて、そこで待つことにした。

ごつごつした木の幹にもたれてぼんやりと座り、二時間ほども経っただろうか。「お父さん」と呼ぶ声がした。

林を出たところに停めてあった赤い車の助手席から玲奈が降りてきた。僕は玲奈に駆け寄って、抱きしめた。

「ずいぶん早かったから、びっくりしたわ」玲奈が言った。

僕たちは後部座席に並んで座り、浩子がハンドルを握った。

「よくわからないんだ」どちらに言うともなく、口を開いた。「連中が装置を動かしたわけじゃない。そもそも装置のある部屋じゃなかった。尋問の最中だったんだよ。それなのに気がつくと僕はあそこ  
にいた」

「不思議ね」玲奈はそう言って、僕の手を握った。「とにかく戻ってきてくれてうれしい。あとは……」

「ここで生き延びるだけだ」僕は呟くように言った。

二時間ばかり走って玲奈のマンションに着くと、「じゃあね、おふたりでごゆっくり」と言い残して浩子は帰っていった。

玲奈がコーヒーを淹れてくれた。

「これは計画された五回目じゃない」カップを口に運びながら、僕は言った。「自分に何が起きてるのか、わからない。これからどうなるのかもわからない」



「とにかくわたしと一緒にいて」玲奈が言った。「五回目の不安はわたしも知ってる。だから、わたしと一緒にいて」

玲奈が肩を抱いてくれた。僕たちは唇を重ねて、舌を絡め合った。それからどちらからともなくベッドに行き、夢中になって愛し合った。玲奈は繰り返し頂点に達した。そのあと、僕たちは何も言わずにしばらく裸のまま抱き合っていた。

「もしこれが計画通りの五回目と同じなら」ふたりで夕食をとりながら、僕は言った。「どうなるかは二週間後にわかるはずだ」

玲奈が僕の手を握った。「生き延びて。何があっても生き延びて」

その夜は「不安で眠れないといけないでしょう？」と言って、玲奈が薬をくれた。僕たちは抱き合って眠りに落ちた。朝、目を覚ますと、ベッドに腰掛けた玲奈が僕の顔を心配そうに見つめていた。

それからの二週間、日増しに募る不安を抱えながら玲奈と過ごした。昼は気晴らしに毎日ふたりでどこかへ出かけた。玲奈がつとめて楽しげに振る舞っているのは痛いほどわかった。夜は狂おしいほどに愛し合い、抱き合って眠った。

よく晴れた日の午後、僕たちは鎌倉の海岸に腰をおろし、肩を寄せ合って海を眺めた。海鳥の声が賑やかだった。

「愛しているよ」と僕は囁く。

「愛してる」玲奈が答える。

僕たちは日が落ち始めるまで、幾度となくそれを繰り返した。玲奈のことしか考えたくなかった。

二週間めが近づくにつれて、胃に重い感じを覚えるようになった。最後の二日はどこにも出かけず、ただ玲奈の肩を抱いて過ごした。僕たちに気をつかったのか、浩子は姿を見せず、時折玲奈に電話をよこすだけだった。

とうとう二週間が過ぎた。僕たちはソファで肩を抱き合って、「愛してる」と言い続けた。気がつくとも真夜中になっていた。

「今日は何も起きなかった」僕はぼんやりと言った。

「そうみたいね」玲奈がほっとしたような声を出した。

「でも、まだわからないよ。明日かもしれない」僕は答えた。

翌日も同じように過ぎた。僕たちは「もしかしたら」と言い合った。少し希望が生まれた。

翌日も翌々日も状況は変わらなかった。

「きつと生き延びたんだわ」玲奈が明るい声で言った。

「そうかもしれない」僕はまだ半信半疑だった。

午後、久しぶりに浩子が姿を見せた。「ふたりきりにしてあげようと思って遠慮してたんだけど」

浩子が言った。「お父さんはもうあつちには戻らないんじゃないかな」

「そうだといいんだが」僕は答えた。

その夜は久しぶりに三人で食事をして、ビールを飲んだ。

翌日からまた玲奈と街に出かけるようになった。玲奈は家での仕事を再開した。「しばらく仕事を

休んだから」と彼女は言った。

日々はしだいに平穩になっていった。一か月が過ぎ、やがて二か月が過ぎた頃、どうやら僕はこの世界で生き延びていけるらしいと信じられるようになった。

玲奈と暮らし、彼女が仕事をしている間はこの世界に慣れるために玲奈の部屋にある本を見繕って読んだ。簡略化された文字にもしだいに馴染んできた。玲奈は週に一度だけ職場に行く。每晚僕たちはベッドで愛し合い、抱き合って眠った。

「そろそろ仕事をしようと思うんだ」半年ほど経ったある昼下がりに、新聞を読む玲奈に言った。

「あら」彼女が顔を上げて僕をまじまじと見た。「何をしたいの？」

「またバーのマスターとか、どうかな」

玲奈が微笑んだ。「いいわ、友達に聞いてみる」

彼女の伝手で、僕は四ツ谷のバーで雇われマスターに戻った。あの世界のあの店に似た雰囲気の小さな店だった。

「あなたにも戸籍があるわね」ある時、玲奈が言った。

「あるほうがいいだろうけど、どうやって？」僕は訊いた。

「記憶喪失でいいわ。だって、本当にこの世界の記憶はないんだもの」玲奈が答えた。

それからしばらくかけて、警察と精神病院と家庭裁判所を何度も訪れ、ついにこの世界の戸籍を手に入れた。

五年後、僕はマンションからそれほど遠くない下北沢の片隅に自分の店を持った。やはりカウンターだけのささやかな店だ。バーの仕事は楽しかった。

「やっぱり向いてるのね」と玲奈が笑った。

僕が突然移動してきた理由は今もわからない。この世界との量子相関があまりに強くなりすぎて、引き戻されたのだろうというのが僕たちの仮説だ。それは玲奈と毎晩夢中で愛し合ったからかもしれないし、この世界に娘がいたからかもしれない。理由が明らかになる日はこないだろう。とにかく、僕はこの世界に今も留まっている。

馴染み客も増えて店が軌道に乗ってきた頃、浩子が職場の同僚と結婚した。小さなレストランで開かれた内輪だけのパーティに招かれた僕は、浩子の幼馴染を装って出席した。ドレスを着た浩子は自分の娘ながらはっとするほど美しかった。

浩子が遊びにきて、三人で夕食を囲んでいたときだ。

「ねえ、お母さんとお父さんは結婚しないの？」唐突に浩子が訊いた。

その言葉に玲奈が顔を曇らせたのを僕は見逃さなかった。

「どうしたの？」僕は訊いた。

「あのね」と玲奈が呟くように言った。「わたしはあなたより二十六も歳上なの。今はまだいいかもしれないけど、あなたはいつかわたしのもとを離れていくわ。それでいいのよ。だからこのままでもいいの」

「いや」僕は玲奈の手を握った。「結婚しよう。そうしなくちゃだめだ」

玲奈が少し寂しそうに微笑んだ。

一週間後、僕たちは浩子と一緒に近くの写真館を訪れた。店頭に家族写真や結婚写真が飾ってある。その店の八十歳は超えていそうな主人が迎えてくれた。

普段着のまま、玲奈とふたりだけの写真、そして浩子も入れた三人の写真を撮ってもらった。ちよつとすました写真や笑顔の写真、主人が撮ったばかりの写真を大きな画面で見せてくれた。

「この笑ってるのが素敵ね」ふたりで写っている一枚を指して浩子が言った。

主人は僕たちの関係を問おうとはしなかった。

「データはメールでお送りしますね」と主人が言った。

「結婚写真なんだから、ドレスくらい着ればよかったのに」と浩子が笑ったが、僕も玲奈も普段着のほうがいいんだと答えた。

写真館を出たその足で区役所に行って婚姻届を出した。玲奈の希望でふたりとも名字を変えなかった。

「おめでとう」区役所を出ると、浩子がはしゃいだ声で言った。

その間にも年に二、三人があゝの林に現れたが、仲間の姿を見ることはついになかった。僕たちは見知らぬ訪問者たちに声をかけるのはやめておくことにした。

玲奈とは時折、元の世界の話をした。

「遅かれ早かれ、この世界の人たちもあつちの世界を発見するわ」玲奈が言った。「だって、あつちにも世界があるんだもの」

「何が起きるだろうね。衝突だろうか」

「戦争にはなつてほしくない」

「でも、軍政を倒してくれるかもしれないよ」試しにそう言ってみた。

「戦争を望むの？」

「望んではないけど、でも民主化は正義じゃない？」

「民主化は実現してほしい。でもね」玲奈は少し考えこむ。「あつちの世界のことはあつちの世界の人たちが決めるしかない気がするの」

「そんなことを言つたつて、君もあつちの世界の人間だろう」と僕は言った。



「どっちの人間なのか、もう分からない。でも、民主主義は勝ち取るものじゃないかしら」玲奈が言った。

「この国の民主主義は勝ち取ったものだと思う？」僕は訊いた。

「難しい質問ね」玲奈が首を傾げた。「でも、この国には間違いなく民主主義が根付いたわ」

玲奈は折に触れて「わたしに気を使わないで、あなたは自由にしているのよ」と言った。

そのたびに僕は「このままでいいんだ。僕は君といたい」と答えた。それは本心だった。僕は玲奈を愛していた。いつしか玲奈もその話題を口にしなくなった。

僕がこの世界に来て十年が過ぎた頃、あっちの世界からの訪問者がぱったりと途絶えた。二年が過ぎ、三年が過ぎ、五年経ってもあの林にはひとりも姿を現さなかった。

「あっちの世界で何かあったのかな」僕は言った。

「計画が中止されたのかしら」玲奈が答えた。「それとも」

「それとも？」

「悪いことはあんまり考えたくないけど、戦争とか？」玲奈が目を伏せる。

「もしかすると、民主化が成功したのかもしれないよ」僕はつとめて明るく言った。「あるいは、ふたつの世界が離れすぎたせいで、ついに量子相関が切れて、こっちの世界を見失ったのかも」僕は武田と上野の顔を思い出していた。あっちの世界で何が起きたのか、可能性はいろいろあるが、真実を知る方法はなさそうだった。あの世界が少しでもいい方向に変わっていることを僕は願った。願うほかにできることはなかった。

これまでにあの世界からこの世界に送られてきた人間が何人いるのかはわからない。百人？ それとももっと多かったのだろうか。中には運よくこの世界に留まって生き延びた人たちもいるはずだ。

僕たちは彼らに連絡を取ろうとは考えなかった。僕たちと同じように、みんなそれぞれにこの世界のどこかに隠れて生きているのだろうか。あっちの世界のことなど思い出さなくてもいいかもしれない。彼らが幸せに暮らしていることを祈るだけだ。

玲奈はそれから二十年生きた。僕は還暦を過ぎていた。晩年の彼女と僕とは傍目には普通の夫婦と少し違っていたかもしれないが、ふたりのあいだにはたしかに愛があった。僕は一度たりとも彼女から離れなかった。玲奈がいてくれればそれでよかつたのだ。僕たちは毎晩まるで二匹の猫のように抱き合って眠った。

彼女の最後の日も僕は彼女が横たわる病院のベッドの隣に座って、すっかり皺が寄つたその手を握っていた。玲奈は最後に僕を見て微笑んだ。部屋には初夏の光が差し込んでいた。

その晩、僕はひとりですつと泣き続けた。

玲奈の遺骨を灰にして、浩子とふたりで船に乗って海に流した。抜けるような青空の日だった。僕の手もとには左手の薬指の骨だけを残した。それは指輪と一緒に小さなガラス瓶にいれて、あの日撮つた結婚写真の前に今も置いてある。浩子が素敵だと言つてくれた笑顔の写真だ。

「お父さんはこれからどうするの？」灰を流したあと、海岸で海を眺めながら浩子が言った。浩子のふたりの子供ももうとつくに独立している。

「バーを続けるさ」僕は答えた。「僕はいつだつてバーのマスターだよ」

「どこかに行ってしまったたりしないでね」 浩子が心配そうに言う。

「行かないよ。あの部屋には玲奈との思い出が詰まってるからね」

浩子が僕の顔をまじまじと見た。「お母さんという、お父さんは幸せだった？ 後悔してない？」

「僕は玲奈を愛していたよ。最後まで」僕は答える。

「それならよかった」 浩子が笑った。

「なあ」と僕は言った。「浩子はふたつの世界がどうなればいいと思う？」

「もうひとつの世界がこのまま見つからなければいい。もうひとつの世界のことなんか知らないほうがいいのよ」 浩子が答えた。

「本当にそれでいいのかな？ もしかしたら、あつちではまだ圧政が続いてるのかもしれないよ」

「あつちの世界のことはあつちの世界の人たちが決めるの。それしかないの。でもね」 浩子が僕の顔を見つめた。「民主化は必ず実現するわ。それは歴史が証明してる」

「歴史か」僕はつぶやいた。

浩子が微笑んだ。「お父さんはまだこっちの世界の人になりきれてないのよ。しかたないわ、お母さんだつて最後まであつちの世界を忘れきれずにいたもの」

「そうかもしれないな」と僕は答えた。僕はまだ時々あの小さなバーに集まった仲間たちの夢を見る。キムと亜由美、コーイチ、吉田、ジョー、武史、奈緒子、田代、そして僕と玲奈。そうだ、僕がこの世界の人間になりきれる日は決してこないのだ。この世界で僕は永遠に異邦人だ。

海からの風が頬をなでる。

「そろそろ行きましょう」浩子が言った。